



淨瑠璃名作集

上

(岡山製本)

大正三年十一月廿五日印刷
大正三年十一月廿八日發行

有朋堂文庫
淨瑠璃名作集上
(非賣品)

編輯兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

享保八年竹田出雲松田和吉兩名にて、「大塔宮囃鎧」を出しゝを淨瑠璃合作の初めとして、後は五人三人、多きは六七人の手に成れるさへ珍しからず、各一場々々を受け持ち、趣向文作に奇を凝らし新を盡して相競ひしかば、場ごとに目を驚かし耳を聳つる事多く、言はば汁も膾も鯛づくめ、椀にも皿にも五種七種の馳走の數々盛り附けたる如くなれば、おのづから箸つけらるゝは仕出し勝れし一二種に止るべきわざなり。是れ拔本と稱して今も床にて語るゝ一段物の流行を促したる主因にして、蓋し連歌の一句より發句の發達せると同日の談なるべし。

拔本即ち一段淨瑠璃は、斯く一部ながらに全體の趣向を縮めたるが如き、充實せる内容を有するものなれども、全鼎を試みざれば猶飽かざるの憾なしとせず。本書收むる所は即ち其の全本にして、從來世に行はるゝ語物のうち、最も著名なるもの二十一種を選択し、之を三卷に別ちて各七篇を收めたり。

底本は何れも流布の丸本に據り、努めて原形を存するに注意したれども、假名がちに讀みにくき所々は、適宜に漢字を當て、句讀を施し、用字・送假名・假名遣等も、特色あるものの外は總て正しきに従ひて改めつ。詞には一々鈎符を附し、稀には發言者の頭字を註し置ける所もあり。由來淨瑠璃の文を讀むに難儀とする所は、多く會話相互の關係と詞章の區別分明ならざる點に在り。或は甲語中に乙言を藏し、一人にして數人に言ひかけ、數人にして一口に發し、自他尊卑の言語縱横徂徠する事電光石火の如く、或は地の中に詞を孕み、詞直ぐに地に匂ひて圓融無碍の妙を極むるさま、唯水月鏡花の別ち難きに異ならず。之れ校訂者の最も苦心を要したる所なり。

毎篇の解題を一々詳述せんも煩はしければ、左に其の年代と作者とを列記し、必要の事項のみを其條下に附言するに止むる事とはなしつ。

一 刈萱桑門筑紫轢(享保二十年) 並木宗輔、同丈輔作

宇治加賀掾の正本に「刈萱道心物語」あり、關係あるべし。

宗輔通稱は松屋宗助、初め田中千柳といふ、西澤一鳳門人也。延享年中出雲松洛等と共に竹本座に筆を執り、享保以降は豊竹座に專屬し、海音出雲文耕堂と共に當時の四天王と稱せらる、寛延二年五十七歳にて歿す。

一三十三問堂
平太郎縁起祇園女御九重錦（寶曆十年） 若竹笛躬、中邑阿契作

竹本座座本竹田近江驕奢の咎にて入牢せし後、一頓挫を來し、同座の人氣を、一時此作にて挽回せりと傳ふる當り作なり。

笛躬はもと若竹藤九郎といひし人形遣、阿契は初め中村閨助といへり。

一奥州安達原（寶曆十二年） 近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛作

半二は大阪の儒醫穂積以貫の子、出雲の門人、竹本座振興の功勞者なり。巢林子に私淑し、翁の愛硯を藏するに因りて近松氏を稱すといふ。晚年山科に閑居し、天明三年五十九歳にて歿す。

一武田信玄
長尾謙信本朝廿四孝（明和三年） 近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、

竹本三郎兵衛作

當時竹本座の衰運を回復せんが爲、東西兩座の太夫を交換するなど、苦心慘愴の計畫も其効なかりしを、此作一たび出でて大當りを占め、四段目に引割御殿のせり上げなどを工夫して見物を喜ばせたりといふ、竹本座掉尾の傑作なり。

一 も染久松新版歌祭文（安永九年） 近松半二作

延寶七年九月廿九日大阪東堀なる油屋の丁稚久松といふ者、主人の娘お染といへる二歳の小兒を負ひて守するうち、過つて川に落し死に至らしめたるを悔い、折檻の爲に罩められし土藏の裡にて縊死せる事實を仕組めるなり。此事實を仕組めるもの、正徳元年に紀海音作「油屋お染袂の白絞」、明和四年に菅專助作「染模様妹脊門松」あり、共に此作と青藍の關係あるもの也。

一 御陣九州地理八道彦山權現誓助劔（天明六年） 梅下風、近松保藏作

鎮西御軍記といへる寫本に、毛谷村六助吉岡の娘に助太刀して京極内匠を討たする事あ

るを潤色せしものにして、竹本座にて妹脊山以來の當り作なり。

一増補 生寫朝顏話(嘉永三年) 翠松園主人校補

文政年間、山田案山子といふ人、竹本重太夫の爲に創作し、完結せずして歿したるを、彼の翠松園主人の舊章に據りて刪補潤色したるもの、もと「生寫朝顏日記」といへりしが、六字の外題は佛號に通へりとして、其の通の忌む事なれば、今の名の七字に改めたる由奥書に見えたり。

大正三年十一月

校訂者 松山米太郎

淨瑠璃名作集 上 目錄

苧萱桑門筑紫轢

一—六

第一 一

第二 三

第三 元

第四 道行越後獅子 兎

第五 六

三十三間堂 祇園女御九重錦 平太郎緣起

七—八

發端 七

第一 八

第二 一〇

第三 一五

奥州安達原

一七—一八

第四 道行親子の友衛 一五
第五 一八〇

第一 一七

第二 二〇

第三 二八

第四 道行千里の岩田帶 二五

第五 二七

武田信玄 本朝二十四孝 長尾謙信

二九—三〇

第一 二九

第二 二九

第三 三〇

第四 道行似合の女夫丸 三六

第五 三五

お染
久松新版歌祭文

三七九—四三八

座摩社の段……………三七九

野崎村の段……………三九一

長町の段……………四二〇

油屋の段……………四二八

御陣九州彦山權現誓助劔
地理八道

四三九—五五六

第一……………四三九

第二……………四四五

第三……………四五〇

第四……………四七二

第五……………四七九

第六……………四九七

第七……………五〇六

第八……………五一八

増補
生寫朝顔話

五五七—六五六

第九……………五二六

第十……………五四〇

第十一……………五五二

大内館の段……………五五七

松原の段……………五六一

宇治の段……………五六二

眞葛が原の段……………五六九

岡崎の段……………五七二

明石船別れの段……………五八〇

弓之助家舗の段……………五八三

大磯揚屋の段……………五九一

小瀬川の段……………六〇四

摩耶が嶽の段……………六〇九

摩耶が嶽の段 三段目の切……………六一四

濱松の段	六三五
宿屋の段口	六三三
宿屋の段	六三八
歸り咲吾妻の路草	六四九
駒澤上屋鋪の段	六五一

荊萱桑門筑紫轢

作者 並木宗輔

大道たいだう廢すたれて仁義起り、國家こくか亂みだれて忠臣ちゆうしんを顯あらはす。此語このごを以て鑑かんみれば、道にも又誠まことの本あり、其誠まことの源みなもとをたづぬれば、戀慕れんぼ愛執あいしやくにしくは無しと。豐葦原とよあしはらの陰神陽神めがりをがみ、探り給ひし天あまの逆鋒さかほこ、種たねひろがりし世々の祚ついで、後小松ごこまつの院いんの御治世ごぢせい、隨したがひ靡くく君子國くんしこく、時めく春はるの榮さかなり。當今たうぎんいまだ御幼稚ごようしなれば、御母つうやうもん通陽門院とんやうもんいん殿、暫はうそく寶祚ほうそを預り給ひ、踏歌たふかの節會せちゑを御行事おんぎやうじ、禁廷きんてい守護しゆごの武士ぶしは、筑前ちくぜんの國くにの住人ぢうにん、加藤かとう左衛門尉さゑもんのじやうしけうぢ繁氏よひ、宵よひより詰つめて宿直守そのるもり、假かに授さづかる官職くわんしやくに、在京さいけいの其間、右大將みぎだいしやうの烏帽子えぼし狩衣かりぎぬ、花はなやかなりし出立いでたちも、衛士ゑしが焚たく火かに光添ひかりぞへ、威ゐあつて猛たけく見えにけり。夜半よはも次第しだいに更ふけ過すぎて、明方あけがた近ぢかき星ほしの影かげ、衛士ゑしは篝かざりを焚たきさして、郁芳門いふはうもんに立出たちいづれば、代しろる時刻いりかたと入代いりかへり、出來いでる衛士ゑしは奥女中おくぢやうちう、御國母おんこくぼの召遣めしつかひ、千鳥ちどりといへる品しな者ものが、すつきりとした下髪さげがみに、似合にあはぬ烏帽子えぼし装束しやうそくも、派手はでな風俗柳腰ふうそくやなぎこし、男欲おとほしがる曲者くせものとは、目元めもとの愛あいに知られたり。繁氏しやうぢきやう卿けいの後に立うしろち、どうやら何ぞ云いひたけに、うづくすれば振返ふりかへり、繁し是ははしたり千

鳥御前、風流なお姿、扱は今宵の篝火は、其元がお勤か、はてしやれた衛士、焚いて貰ふ篝めは果報な奴」と挨拶の、中にちつくり色持たす、じやれは物師の印なり。千鳥の前は先取られ、何といらへも恥かしく、顔を赤めて居たりしが、てんほの皮と御手を取り、「七年餘りの御在京、御参内の度毎に、御簾の透より垣間見て、ひよつと燃えつゝ戀の篝火、思ひの煙絶えぬ故、露程なりと此心を、申上げたき願にて、形をやつす衛士の役、胸の焚く火に焦がれ死ぬ、命を助け給はれ」と、御弱腰に抱著く。元より好む色男、否にはあらぬいな船の、漂ふ心を押沈め、「志は過分ながら、禁中在番の某、御所の女中に不義ありなどと、風聞あつては後日の難儀。折もあらん」と云捨てて、振り切り給ふを「そりや成らぬ、はもじい事の有たけを、云はして置いて胴慾な、お上の事は公なれば、こんな詮議はござんせぬ。よしお咎があるならば、罪を私が一人して受けませう。其段には氣遣無く、どうなとせうとつい一くち、嬉しいお詞聞かせてたべ。さう無ければ何ほでも、放しやせぬ」と取付くを、「イヤ、夫は勝手了簡、高吞込で受合はれぬ、許し給へ」と振放し、彼方此方へ外しても、猶も離れず附纏ふ、折もこそあれ御簾を卷上げ、御母通陽門院、關白良基公を始とし、公卿を伴ひ出で給へば、二人は庭に敗亡の、逃けもやられず平伏は、誤り入りし風情なり。國母御聲麗しく、「苦しからず、遠慮なせそ。深く

も思染めたりし、色をばいかでさますべき。コレく繁氏、國に妻子を残し置き、枕の伽も七年餘、懈怠無き勤番の、褒美に千鳥を取らすべし、寂しき閨の友とせよ。其いにしへ、近衛の院、源三位頼政に下されしは、池の眞菰に水増して、引きぞ煩ふ菖蒲の前、夫には引替へ戀風に、吹立てられし浪の上、啼騒いだる千鳥ぞや。長く比翼の友羽がひ、打交せよ」と宣旨あれば、「コハ有難し」と繁氏卿、千鳥は猶も悦びの、胸落著けど心は急き、「又もや御意の變らぬ内、私はお屋敷へ、お先へ參つて待ちませう、お前は跡から御歸館」と、早しこなせし妻形氣、いそぐ立つて入りにけり。折からしらす朝嵐、人の面も白々と、明渡りたる四方の空、「御番の代り」と聲かけて、豊前の大領大内之助義弘が舊臣、多々羅新洞左衛門秀貫、白髪交りの曲者、階下間近く額を下け、「今日守護の勤番は、主人大内義弘が役目の所、此間より所勞に依つて、某が名代、御赦免仰ぎ奉る」と奏すれば、繁氏立寄り、「病氣とあれば餘儀無き仕合、天子にも勅許有るべし。イザ役目を譲り代らん」と立出でんとし給ふ所へ、執權監物太郎信俊、「奏聞の事あり」と、訴出て庭上に畏り、「扱も高雄の御山は、觀音薩埵の靈驗あつく、諸人の信心日々に彌増し、歩を運ぶ靈地なるに、十日ばかり以前より、身に香染の袈裟を懸け、おどろの髪振亂し、高足駄にて異形の行人、夜は洞穴に取籠り、晝は山を徘徊して、往來を悩す由、昨日夜更に及びて

の注進、如何計らひ申さんや」と申上ぐれば、關白良基公笏執直し、「出家ならば佛意を慕ひ、難行苦行に身をこらし、道をためす教もあり。有髪の行者は心得ず。殊に往來を惱す由、何にもせよ聞捨てになり難し。帝都の騒ぎにならざる様、汝密に行き向ひ、都の内を逐拂ふか、異議に及ばよ召捕つて糺明せよ」と仰の内に、「承る」と立つ所を、新洞左衛門「暫し」と呼留め御前に向ひ、「夜前までは彼が主繁氏の勤番、今朝よりは手前の主人、大内義弘が役目、此討手某めに仰付られ下され」と、願へばやがて監物太郎、「イヤ是新洞殿、高雄山は北嵯峨に相續き、主君繁氏が預り場所、其上拙者が承つた役目、横間より手前へとは我儘至極」と云はせも立てず、「ヤア武の道から武を望むを、我儘とは舌長し。是非此討手を某に」と、云捨て立つを、「どこへく、人の役目を好い年して、かち落さうとは大人氣無し。似合うた様に圓座の上、髭を數へて居召され」と、詞荒して駈行くを、走りかゝつてしつかと執へ、「年は寄つても此親仁、まだ腕先には覺がある。行かれうならば行て見よ」と、引留めたる力瘤、「エ、面倒なる老耄め」と、もぎ放せば擲付く。「待てよく」と關白の、仰も聞かず繁氏の、詞も餘處に監物太郎、一ふり振つて振放し、飛ぶが如くに駈出すを、奈落までもと新洞左衛門、辭儀も作法も白砂を、踏散らしてぞ追うて行く。通陽門院叡感あり、「大内には歌爭、武士は武を爭ふ、其家々の習と

て、勇しき有様かな。勇む心に迎ひを待たず、嫁入急ぎし千鳥の前、さぞ館にて待ちかねん。
宿の塹を暖めて、友鳴にせよ繁氏」と、御褥を立ち給ふ、御戯は常陸帶、結ぶ契は千代八千
代、變らぬ國の三重春風も、匂を含む一霞、都は辰巳高雄山、峯は斜の白雲に、巖聳えて茫
茫たる、雪も解け行く谷川の、苔滑かに松の聲、けに物棲き景色なり。袂衣に靡く若草の、素
足で歩ふ御所女中、男交りにざよめくは、千鳥御前のお乗物、繁氏卿のお館へ、押付けて行く
嫁入分、道を廻つて觀音詣、結ぶ誓のかねの緒に、縁も長き山坂を、息休めにとお乗物、松
の木蔭に立てければ、今日ぞ雲井の眉解けて、立出で給ふ千鳥の前、花を隈どる御姿、袂吹返
す戀風も、憂きとや人は羨まじ。嫉どもはざわくと、籠を放れし里雀、中にも梢が囀りて、
「なんと皆の衆、小面の憎い此松に、抱付いた藤わいの。丁度あの様に千鳥様も、繁氏様にしが
み附いて御座らうの。彼様器量の好い殿御、御果報なあやかり物」と、なぶり懸れば礎が差出
で、「そりや知れた事、云やるがくだ。したが、どうも吞込まぬは彼方のお心、今までは御所住居、
やもめ鳥の千鳥様、飛立つ程に思召し、一寸でも早うお屋敷へござる筈、それに氣疎い廻りし
て、觀音参りが心得ぬ。お持たせ振の道草か」と、尋ねれば打笑み給ひ、千鳥様子知らねばさう
思ふも理、いひ出すも恥かしい事ながら、繁氏様に惚れたのは、今更の事ならず、とうから惚

れて居るわいの。お國くにには石動君いしどうぎみとて、若殿みまである御臺様だいさま、れつきとして御座るとは知りながら、思おもひ初めては忘れず、焚たき付けて見る衛士ゑじの篝火かざりび、姿をくろむ濡衣ぬれごろも、つい門院様に見付けられ、ハット心に思おもひの外ほか、お氣の通つた粹すな勅ちよくぢやう諭う。是と云ふも自みづからが年月としつきねん念ずる心の誠まこと、偏ひとへに觀音様の御利生ごりしやうと思ふから、道よりしてのお禮れい参り。オ、恥はかし」とばかりにて、御乗物おんのりものに召し給へば、礎それ夫それなれば御尤ごもつとも、愈いよく大悲だいひのお力で、いぢむぢのない様に、晩ばんからはねびのだん、段々によい戀枕うんく、うんく雲雷うんらいくうせいでん、雷かみなりに臍取へそぎられぬ内、急ぎやく」と我われ一いちに、行掛りたる向ふより、惡者わるもの作りの深編笠ふかあみがさ、供先押割りのつさく、「ちと乗物へ御訴訟ごそしやう」と、のさばりながら立寄れば、家來の者ども聲々に、「願訴訟ねがひそしやうの事ならば、なぜ記録所へ往て吐ぬかさぬ。ハレ狼狽うろたへた素浪人すらうにん」と、嘲笑あざわらへどちつとも怯ひるまず、「おのらが知つた事で無し」と、押退おしのけて乗物の傍そば近く、「コリヤ妹、見ぬ顔するは手が悪い。兄あに黒塚くろづかの鬼藏人おにくらんぎ、見忘れはしよまいがな。最前さいぜんから様子を聞けば、そちは今日けふ繁氏殿はんしでんへ嫁入よめいりをするとの話はなし、それなれば無心むしんがある、某をお館へ連つれ行き、私が兄でござる、お取立たの頼みますと、たつた一口詞を添へなば、義理ぎりにでも繁氏殿はんしでん、世話せわしやらねばならぬ事、さすれば兄が身上しんじやうに有付く。とかういへば思案しあんがある」と、妹に向ひ居合腰ゐあひこし、刀捻ひねくり嚇おそせしは、大人氣おとなけ無くも面憎つらにくし。當惑たうわくながら千鳥の前、乗物の戸を押